

平成四年十月二十一日 ご講演

## 「ソビエト大横断一万四千キロ」

防衛大学校教授 瀧澤一郎先生

ただ今ご紹介にあずかりました瀧澤でございます。今日は一時間ほど時間を与えられておりますので、私が一昨年やりました、バイクによるソ連横断のことについての話をしようと思います。まあこれは面白おかしい話も沢山できるのでありますが、これでやりますと、今日は漫談会で終わってしまうといけませんので、そこで得た見聞に基づいたソ連の話、ロシアの話、そして今一体ロシアではどういうふうになっているのか、それに、ついこの間の日本へ来ると言っていたエリツインさんが来ないで、まあ混乱している方々もいるわけですが、一体どうなっているのか。これからエリツインさんはどうなるのか、ロシアはどうなるのか、日露関係はどうなっていくのか、というところまでちょっと欲張って話してみたいと思いますので宜しくお願い致します。

ただ今、前川塾長のご紹介にありましたように、もうかれこれ三十年近く前の事なのですが、私は学生時代に御一緒させていただきまして、

ロシアのあちこち、或は東欧のブルガリアといった所を見聞させてもらいました。大変私にとってもいい体験になりました。益々ロシア、東欧に対する関心が強まっていき、ついにその専門家になってしまった訳です。しかしその頃から、ロシア、或はソ連という大きな国、日本の六十倍もある大きな国を視るのに我々が行ける所というのはモスクワとかレニングラードとか、或はシベリア地方ではノボシビルスクとかハバロフスク、イルクーツクと、僅かな点でありました。ここだけを視てですね、「ロシアとは」といつてもわからないのです。なんとかロシアを、少なくとも面とまではいかなくとも線くらいいつないで視てみたい、という気持ちこそこの頃から持っておりました。

しかし、ご存じのように、旧ソ連というのは大変な秘密国家でありまして、外国人を寄せ付けない体制になっておりました。まして、外国人の入り込めないような場所に無理やり入ろうとすると、これは当然とつ捕まってシベリア

送りになっていました。そういう状況下でありましたので、これは見果てぬ夢としてある程度諦めた形できたわけです。ところが、一九八五年、ゴルバチョフさんが出てきて、ペレストロイカを始めた。丁度その頃、私は実は自分のソ連研究のために家の庭に三メートル位の大きなパラボラアンテナをつけまして、ソ連のテレビを直接、受信し始めました。それをやりますとモスクワのテレビが衛星を経て、もちろんソ連の衛星ですけど、リアルタイムで見られるんですね。これを、時間の許す限り見ていた。そうすると段々ロシアの開放されていく動きが手に取るように見えるわけです。それでこの様子を見ていると、なんとなくこれは、「そういうことが出来そうではないか」という感触を掴んだ。そして、私は思い切ってモスクワに行った折にソ連のスポーツ大臣に会いまして、こういう計画があるんだけどなんとかできないかと、ぶつけてみました。

まあこれは私も必死でありましたので、何を

喋ったのかよく覚えてないのですが、何かロシア語を三十分ぐらい喋ったらいいのです。このスポーツ大臣は私の熱にほだされたらしく、まあ良からうということで、向こうの大臣はそこに十個ぐらい電話があったのですが、電話の幾つかをとって、まずKGBの議長、次に内務省といった、我々外人がうろろした際、お目付け役をする最高責任者に電話して、あつという間に話は進んで、まあそんな具合に話を終えた訳ですが、その辺の詳しい顛末は私の『ソビエト大横断一万四千里』の本書に詳しく書いてあります。ちよつと話の最初からコマーシャルで恐縮なのですが、このロビーで即売してますので、ご関心のある方は買って頂いて読んで欲しいのですが、面白くてきたと自分で言うのもなんですが、評判でして文藝春秋社から出版したんですが、版を重ねましてベストセラーとまではいかないのですが、ウン万部の売行きだそうです。まあこれは面白い、ロシアのバイク旅行記を読んでもうちに知らぬ間にロシア通になるという不思議な本で、宜しくお願ひしたいと思います。

まあこの旅の詳しい話は本にゆずるとしまして、まず、ずーっとロシアを横断してみますと非常に幾つか印象深いことがあります。その一、二だけを少し紹介しますと、まず道が無いのです。まあおよそ文明国で、国の端から端

に行けない国というのは無い訳ですが、あの国は行けないんです。つまり日本のすぐ近くにウラジオストックとナホトカという大きな町があるんですが、ここからモスクワにつながっている道は無いんです。

我々はもちろん、万端の準備を致しましてロシア、ソ連に関しての入手できうる限りの資料を得まして、これらを調べましたが、だいたい実際行ってみますと地図に書いてある道は無いんです。そして書いてない道はあるんです。そんな訳で全く地図はあてにならない。それで一番、我々が頼りにしたのは、実はアメリカのNASAがスパイ衛星から撮った特殊な地図で、これしか信頼できる地図はありませんでした。

で、何故こういうことになったかと思うんですが、やはりロシア、ソ連という国は共産主義的な全体主義国家ですから、やはり独裁者に都合のいい、少数支配者にとつて都合のいい国を作っている訳です。独裁国家にとつて何が都合悪いかと言えば、情報の流通であります。限られた情報を首脳部が握って、その中から国民には必要なものだけを与え、あとは全部抑えておく。こういうのが全体主義国家の成立ちに絶対に必要な訳ですが、その一環として国民を国の中を自由に移動させないよう、故意に道路整備をしなかつた。

こういう面は通信網も同じです。ロシアの国内では、皆さんの想像もできない事なんですが、市外電話というものが、つまり都市と都市の電話が未だにダイヤル直通ではないんです。まあ少しづつ改善されつつあるのですが、ですから例えば日本から眼の前のナホトカに電話しようと思つてもモスクワ経由になつてしまい、しかもつながるかどうかわからない。今でもこういう具合ですね。交通手段、通信手段をズタズタに、つながないでバラバラにしておく。これが国家の支配なのです。都合がいいからこうなつたのです。

それからもう一つ非常に印象的だったのは、シベリアのどんな小さな町に行つても教会があるんです。これはもちろん昔の教会でありまして、たいていは壊れているんです。ご存じのように共産主義思想は宗教はアヘンであると決めつけまして宗教を破壊します。同時に国内にあるあらゆる教会をどんどん壊していった訳です。でありますので小さな田舎にある教会が、例えばそのまま建物に使われまして、商店になつてるものもありました。或は町の集会所になつてるものもありました。こんなのはまだいい方で、なんとですね、非常に目立つたのは多くの小さな町で教会が共同便所になつてました。私は無信心なもので仏教もキリスト教も良くわからないんですが、やはり教会が共同便所に

なっていて、このロシアの田舎の便所というのは相当な汚さなんです。まず水なんか流れない。そういうトイレでは中に入るとハエの大群が攻めて来るような、そんな所です。そういうような教会を見ると、さすがにこれはいかんと思えました。

これがやはり現在のソ連崩壊の少なからぬ原因になったと思うのです。やはり一国が成り立つて行くについて、国民のモラル、倫理観というのが非常に大切だと思うのです。かつてロシアの農民というのは世界で最も敬虔な国民でありまして、田舎の百姓さんらは週末になると必ず教会に行つて司祭さんの説教を聴いた訳ですね。ロシア正教の教会というのは椅子がないんですね。立つて話を聴くんです。すると司祭さんができて兄弟仲良くしろよとか、はじめに働いてちゃんとした家庭を作れよとか、夫婦仲良くしろよとか説教をしたんですが、こういう通俗的な倫理の道を説いたものであります。しかしそれはそれなりにロシアの心のモラルとなつて旧ロシアを支えていた。

そしてその宗教観、モラルを全て捨てよと命じたのが共産主義革命だった。この革命はある意味では宗教革命だったと言えるのです。つまり共産主義が説いた思想は、ある意味では非常に宗教的な組立になつてゐるんです。だからこその他の宗教をあえて全部廃止せよと命じたと思

われます。そういうことで、もちろん共産主義的倫理観というのもあつたのですが、この多くものは非常に過酷なものでした。例えば共産思想の根本のものとしまして、「クトーカヴォー」というのも一つの世界観で、これはロシア語で誰が誰をやつつけるかという意味で、まさに力による権力抗争というものを価値観の根底に置く思想だったんです。

そういう、「なんじ隣人を愛せ」というキリスト教的な世界観が、一気にそういうものに移つたというのが社会に大きな歪を与えたんじゃないか。まあ少し話が飛躍するかもしれませんが、現在のロシアで毎年離婚する人は約百万組あるといひます。これにはいろんな原因があります。まず、今ロシアは非常に経済的に貧しいことがある。また非常にかんりの部分がとても若いときに結婚して、それも若いカップルが付き合い始めて一週間や十日位ですぐ結婚するといひのも理由かもしれませぬ。しかしこれはロシアの社会学の研究の統計上からも完全に裏付けられるんですが、やはり倫理観の欠如が非常に大きい。しかもかなりの部分、夫のバカ酒飲み、そして妻を殴る。向こうでは妻を殴ると離婚の完全な原因になる。裁判所でもOKがでる。だから離婚したくなるわけと殴る奴もいる。

まあそれはともかく、ロシアは北の位置にあ

りすぎて、強い酒を飲まない体が暖まらなくて仕事にならないこともあります。あんなに飲まなくてもと思う程ロシア人は酒を飲むんです。ちよつとやそつとじゃない、ロシア人がそう言うんです。私は学生時代にモスクワから来た有名なオーケストラの通訳をしたことがあるんですが、その時、世界的に有名な指揮者の人がポツリと漏らしたのですが、なんで自分の率いる楽団員達はあんなに飲むのかなあ。本番の前にうやむやになつて、ベース弾きが、ベースにずっとよりかかっている。楽団員達は立つてるだけで一向に弾かない。それも東京に来てまで同じようで、なんであんななんなんだろうと嘆いていたのです。しかしこれもですね、やはりそうした共産主義社会の一つの弊害でもあつたんです。これは今、旧共産党の人達が非常に反省の意味をこめて言つてゐるんですが、やはり共産主義的支配、全体主義的な支配のもとでは、国民が余りにも強い「たが」でギューギュー締められて身動きがとれなくて、思うことも言えず、ストレスが溜りすぎた。しかも娯楽施設も少ないので結局酒に走つたのではないかと、こういう事が確かにあつたと思つてゐる。酒の弊害を数え挙げたらきりがありません。が、私もバイクで走る時、なにしろ酔っぱらい運転が多いもんですから、向こうからフラフラした車が来たら絶対逃げるように、と一緒に

つた六人の仲間に強く言い含めて出発したのです。何しろソ連で一九八八年の統計で交通事故の死亡者が既に五万人近くなんです。九十年で我々が行った年にはもう五万人を突破しました。今、日本では、交通事故死亡者一万人というのが一つの大きなレベルで、これを何とか越えないようにと考えているのですが、これがなんと五万人ですから。しかもあの国の車の少なさ、それから大都市に於ける道の広さ、こういうのを考えると交通事故自体が不思議で、しかも事故のほとんどが酔っぱらいによるもの、しかも死亡者の中に子供の割合が非常に多いのです。これはなぜかという、酔っぱらい運転が子供が遊んでる中へ突っ込んで行つて一度に子供を何人も殺してしまうというケースが多いんです。

まあそれはともかく、酒に逃避する、モラルが低下する、というような事が七十年の共産主義の中で、だんだん澱のように積み重なって、にっちもさっちも行かなくなってきた状況が、ペレストロイカ前の状況であった。これが一番強く表れたのは、労働規律の面なんです。

今はエリツインがロシア大統領、その前はゴルバチョフさんがソ連大統領、その前にちよつとだけだった病気の書記長のチェルネンコという人がいました。それから元KGB議長でコワモテのアンドロポフ、その前がブレジネフ。

ブレジネフは一九六四年の東京オリンピックのあった年からずっと書記長の地位にあつてゴルバチョフの台頭の八十年代までずっと最高権威者の地位にあつて、このブレジネフ時代のそうした労働規律、それから飲酒の弊害がすごく社会問題化してきて、大変な状態だったのです。よく言われるんですが、ブレジネフ時代は、ソ連の工場とか官庁に出勤するとき、だいたい這つて入れれば出勤したことになった。ベロベロに酔っぱらつても工場の玄関を這つて入るんです。入りさえすれば出勤なんです。これは本当です。これはいけないということであンドロポフさんが出て来て、ブレジネフが死んだ後、アンドロポフ書記長の第一スローガンとして労働規律の向上にもすごく力を入れた。まず這つて入るな。立って入れ、とかですね。そこで先程のオーケストラのベースの演奏者じゃないですけど、寄りかかつても立ってたんです。でも立つてるだけで、立ったまま寝るとか結局生産は上がらないのは同じなんです。そういう経済の混乱というのはすこいものがあったんです。

私は今でも鮮明に覚えているんですが、前川塾長のカバン持ち兼通訳で一九六八年モスクワ近郊のどこの工場だったか、大きな工場へ朝早く九時前だと思つてますが、そこへ行きまして。ソ連の生産工場は、べらぼうに大きくて、

五万とか六万の従業員つていうのはそこらじゆうにあるんですが、そこは何万人いたか覚えてないですが、とにかくこつちから見ると向こうのラインの端はかすむ程大きな工場でした。そこにずっと廊下があつて、その廊下に朝九時前ですからそこに若い女性がダーと寝てるんです。うら若い女性で、「なにしてるんですか」と聞くと「休んでるんです」と答えました。もしかすると、ずっと夜勤で交代で休んでるのかもしれないですが何もコンクリートの上で休むことはないじゃないですか、と言ったのです。だいたいには私は築地の魚河岸生まれで、昔から遊び場の市場には沢山マグロがいたんですが、あたかもそのようで、それでよく覚えてるので。あれでは生産が能率的に進む訳がないですね。

そういう経済の不調、労働規律の乱れ。ですから今、たしか今日のニュースか何かでロシア経済はますます悪化して、失業者は百何十万でるといふのは非常に困難な予想であります。私はこれは全然昔と同じだと思つてます。つまり当時ソ連の失業者はゼロということになつてたんです。失業者がいらないという、資本主義では夢のような国で、ソ連にあこがれる人らは夢の天国だと思つてたんですが、実は失業者はいたんです。どこにいたかと言うとそれは工場の中にいたんです。何も仕事しないでぶらぶ

らしている人がたくさんいた。だから生産が全くいい加減になされていました。

当時、ブレジネフ時代にソ連に大きな企業は幾つもあったのですが、当時の企業の企業長、日本という社長ですが、どんな企業長が優秀で人望があつたかという点、できるだけ中央の。その前に少し、旧ソ連の生産体制とはモスクワに国家計画委員会ゴスプランというのがありましてここから国内の大きな企業に、「お前の所は今年齒車何個、お前のところは施盤を何トン、お前は戦車を何台」というふうに中央から全て命令したのですが、こういうのを命令行政経済というのです。合理的な命令をしている訳だから景気変動上・下ゼロ、失業者も不況も何もないという理想的な経済政策になるはずだったのですが、ところが当時の企業長らは何をやったかという点、ゴスプランからできるだけ少ないノルマを——つまりその年の生産高をとりにつける。そして自分らが実際に生産した量ができるだけ粉飾して申告する事、それも二、三倍も申告する、こういうのが優秀な企業長とされたのです。

中央ゴスプランからできるだけ少なくとって、できるだけ多く生産したかのように申告できる人が優秀な企業長だったので、当時モスクワに集まる生産統計とは殆ど虚偽なのです。だからそれを集計すると国家の統計とは

全くのフィクションになるのです。だからソ連は米に次ぐ第二の工業国ということになってたんですが、実は内情はともお寒いもので、今、この当時のブレジネフ時代の統計の最高責任者が言っているのですが、我々が世界に公表した統計の数字は殆ど作り話だ、となつていてのです。

そんな訳で国家の膿みたいのが体中に回って動けなくなつたのが、およそ一九八〇年代前半の状況だったんです。私がどうしてちよつと古い話をするのかというと、その辺のところをみないと、今のロシア状況が掴めない。それから将来のロシアの方向も、その辺から見るとよく見えてくる、ということなんです。

このゴルバチョフは一九八五年の三月に書記長になつた訳で、彼がその時、ペレストロイカと叫んだからペレストロイカが始まつたような印象があるのですが、実はそうじゃなくてペレストロイカのような根本的な国家改造をやらないと危うくなるという危機意識が、ソ連国内の優秀な人達の間から、既にブレジネフ時代の末期、八〇年代の初めからあつたんです。そして彼らが最も自分らの国が危ないと考えたのはいつかという点、私はどうやら一九八三年ぐらいだと思います。どうして八三年頃かという点、一九八三年三月、米のレーガン大統領がSDI政策というものを発表したのです。これ

はご記憶のことと思いますが、SDIというと今は忘れ去られた感がありますが、アメリカがコンピュータを駆使してネットワークを作り、ソ連が万一大陸間弾道ミサイルを発射しやすと即座にスパイ衛星が探知し、軌道を計算して同時にアメリカ側も、ソ連のミサイルが軌道にのる前に迎撃ミサイルを発射して撃ち落とすという計画なんです。この事はソ連にあつた全てのミサイルが同時に発射されると、それを全て撃ち落とすというのは今の技術でも無理なんです。ミサイルの半分でも撃ち落とされたとしてもこれではかなわないとソ連の技術者達は考えたのです。そうなる点、いざ米とソ連間に戦争が始まつても負けるしかないという、国家安全上の危機感が、八三年の頃、軍やKGBがアメリカの事をスパイしてよく知っている人達が言い出した。

それではソ連にはノーベル賞学者もいるし、優れた科学技術のある国だから、即、米に対抗したシステムを作ればよいと共産党の首脳らが言つたんですが、科学者らは「できません。ソ連にはコンピュータがありません」と言いました。こうするともう、怒つてもはじまらない。では何故コンピュータがでなくなつたか？ この背景を色々分析したんです。そうするとなんととっても経済の遅れがある。科学技術と云うのは非常に強固な経済生産の基盤の

上に於て成り立つわけですから、やはり経済の不安定なところに優れた科学技術は育たないのです。もう一つ、もっと大きなことを発見しました。

ソ連でコンピュータが遅れたのは共産党のせいなのです。一九五〇年代の事情をかいつまんで申し上げますと、当時スターリンのもとで党中央委の科学技術部長をしてたトラペズニコフという人がいるんですが、この人は字が書けなかった。よくそれで文部大臣よりも偉い科学技術部長になれたか。中央委員会の部長といいますが、大抵配下に大臣を十人位従えてるといふ非常に地位の高い人なのです。これはスターリンに非常に気に入られた人だったので。コンピュータサイエンスの基礎的な理論となったサイバネティクスをご存知でしょう。コンピュータを研究なさっている人は必ずお目にかかったことがある、ノーバート・ウイナーという天才的学者、十八歳でハーバード大学の博士号をとった人がいました。この人が作った理論で全てのコンピュータサイエンスが成り立っているんですが、トラペズニコフはこれがマルクス・レーニン主義に合わないと言ってしまった。言ってしまうと理由などどうでもいい、共産党の最高幹部が言ってしまうと、これは公理となってしまうのです。絶対挑戦できない。当時、非常に優秀な科学者らが、早く

もコンピュータを研究していたわけですが、ソ連は数学とか基礎理論でもとても優れていた訳ですから、コンピュータでも十分世界の一流になる下地はあったのです。ところがコンピュータの研究者がアメリカの理論の本を買いますと、これはもう反体制科学者だとなるんです。シベリアの収容所に入れられた。ですからソ連の反体制科学者とか反体制運動派の中には数学者、物理学者が非常に多かった。サハロフさんとか、一九八六年にソ連スパイと交換されたシャランスキーという反体制活動家、この人は有名な数学者です。こんな人が多かったのは以上のような理由によるようです。

でありまして、ソ連でコンピュータが遅れましたのは共産党の為だったのです。これが八〇年代によくわかったのです。それで共産党の幹部達は愕然としたのです。これではいけない。ではなぜそうなったのか。共産党は「無謬の党」といわれ、過ちを犯さない党だったのです。過ちを犯さないから批判は許さないと。国民が共産党を批判するのは絶対許されなかった。共産党を批判すると、これは反体制としてシベリア送りになった。

やはり我々は誤りを犯してきたんだ。それは、国民からの批判を許さなかったからだ。少し国民の批判を許す方に向かおう、共産党を少し開かれた党にしようと言う反省が否応なしに生

れて来た。そうしないと共産党は死んでしまう。特にその頃、共産党の人にショックだったのはポーランドの党がもうすぐでにおかしくなっていた。八〇年代の初めに今、ポーランド大統領のワレサさん、あの人は「連帯」という労働組合の親玉になって共産党をどんどん追いやっていった。そしてポーランドの共産党はくさりきってしまった。そして、幹部の汚職とか自分の子を共産党幹部にさせるとか、腐敗が始まり、支配能力を失ってきた。これが、ポーランド共産党の凋落の原因だと当時のソ連の共産党の中央委員会の分析で判断されたんです。

ゴルバチョフの前の、チェルネンコという病気の書記長がいたんですが、糖尿病とかで書記長になった時からヨレヨレだったのです。まあ一年余りで亡くなったのですが、この人はブレジネフの子分で、無能の書記長とか愚鈍の書記長とか言われているのですが、何分、私はヘソまがりです、彼の書いたものを全部読んでみたのです。すると、そこに今述べたような事が書いてあったんです。ポーランドの共産党のようにソ連の共産党も腐ってしまう。もっと批判を許そう。共産党独裁でなく、もっとほかの党があってもいいじゃないか、とこんな事が書いてあるのです。しかしこれは必ずしもチェルネンコ自身が言った事ではないかも知れないんです。しかし、ソ連の最高首脳部でこのような

議論がなされてたのは事実です。そういう国が、  
 につきもさっちもゆかなくなつて国民に土下  
 座して、「我々ははずいぶんあやまちを犯しまし  
 た」と謝らねばならなくなつて始まつたのが、  
 ペレストロイカだったのです。しかしペレスト  
 ロイカをやるには非常な困難がある。

そこで少し若くて元氣のある奴を書記長に  
 しようとして、五十四才のゴルバチョフが史上  
 初の若い書記長として登場した。そしてペレス  
 トロイカとなつた。このペレストロイカの中に  
 共産党の自己批判、自己懺悔という意味が十分  
 に含まれていた。ところが、ここが実は命とり  
 だったのです。

この共産党は、あらゆる面をコントロールし  
 てましたから、批判もある程度コントロールさ  
 れた形で現してゆけると思つていたのです。と  
 ころが国民は批判ができるとなると、国中が反  
 共の熱気に包まれてしまった。それにはムリも  
 ないわけです。先程も宗教の話をしましたけれ  
 ども、ブレジネフ時代、非常に宗教弾圧もあつ  
 たわけですが、この当時でも、ロシア正教の隠  
 れキリシタンではないのですが、隠れてながら  
 も、半ば公然として教会に通つた人は五千万人  
 もいたのです。それから旧ソ連のスターリン時  
 代に、殺されたり、収容所送りになつた人や、  
 正式な裁判なしにあやふやな理由で死刑にな  
 つた人とか、そういう数は千万人の単位になつ

たのです。これは驚くべき事です。しかも、第  
 二次大戦中にドイツとの戦いでソ連人が二千  
 万人死んだとよく統計にはありますが、最近に  
 なつてきちんと数えますと、実は二千七百万人  
 死んだというふうになつて、間もなく三千万人  
 にもなると思つたのです。これは殆ど独ソ戦の始  
 まつた一九四一年の最初の一、二年の間にまと  
 まつて死んだのです。ある意味ではスターリン  
 の個人的な非常な失敗によつて殺された人達  
 だつたと言つてもいいのです。スターリンは、  
 日本にいたスパイ団の親玉のゾルゲとか、ヒト  
 ラーの秘書なんかにも沢山優秀なスパイを送  
 り込んでたんですが、一九四一年六月にドイツ  
 がせめてくる。それも二十二日と日付まで指定  
 して事前に全てそんな情報を知つていたんで  
 す。にもかかわらず、スターリンは情報を信じ  
 ず、「絶対そんなことはない。ヒトラーとは不  
 可侵条件を結んである。絶対攻めてなんかこな  
 い」と言いはつて失敗してしまつた。

ドイツがソ連に攻めてきた最初の一週間、ス  
 ターリンは自分の部屋に閉じこもつて出てこ  
 なかつたという有名な話があるんです。それく  
 らい彼にはショックだったのです。しかし彼が  
 情報を正しく評価せず、準備を怠つたのは事実  
 なんです。ある意味では二千七百万の人はスタ  
 ーリンのために死んだと言つても過言ではな  
 いのです。それくらいスターリンに代表される

ソ連共産党に対する国民のうらみは、もの凄く  
 強かつた。今、旧ソ連の誰かに話をして、自分  
 の親戚や親をスターリンに殺されたという意  
 識を持つていない人を見つけるのはまず困難  
 です。極端な例を言えばゴルバチョフの祖父も  
 スターリンに殺された。ゴルバチョフの奥さん  
 のライサさんの母、父方の両祖父母共にスタ  
 ーリンに殺されたんです。ある意味ではあの人を  
 最高権力者においたのは間違いだったのかも  
 しれません。だからゴルバチョフは共産党をつ  
 ぶしたんだと言うロシア人もいます。それは少  
 し言いすぎかもしれませんが、彼の中に、共産  
 主義に対する痛烈な批判意識がなかつたとは  
 言い切れない。

そういう訳で国中に共産党批判のムードが  
 高まり、あつという間に反共という政治勢力が  
 でき、反共・反モスクワ、そしてモスクワから  
 はなれて、かつて旧ソ連を支えた共和国はみな  
 独立という形で離れていった。そうすると非常  
 なナダレ現象がおきてきた。そして当時、共産  
 党内で勢力争いしてたゴルバチョフとエリツ  
 インがいたんですが、エリツインは非常に政治  
 的な雰囲気を見るのが敏なんで、共産党内部で  
 自分にはもう芽がないと見るとサツと反共の  
 方に寝返つた。そして反共、共産党をつぶす方  
 のボスになつた。そういう反共の親玉になつた  
 エリツインですが、元々、共産党の大幹部です

から、エリツインのやつてる政治的手法というのも全部共産党的な手法を使つた。しかし、自分の権力を得るため、便宜的に反共の方にのり移つた。

そのエリツインと、依然として旧共産党の親玉でありましたゴルバチョフ。この二人が非常に微妙なバランスで争つてたのが去年の八月のクーデター直前の情況だったので。そこであのクーデターが起つたんですが、あれがなければ、ゴルバチョフさんは、今もまだソ連の大統領だつたと思うのですが、あの事態がおこつたのは彼にとつて非常に不運だったので。しかしエリツインさんにとつては願つてもない幸運だつたんです。棚からボタもち、天から降つてきたという形。だからあつという間にソ連の最高権力者の地位にしまつた。

あのクーデターの話も非常にもしろく、あれだけでも一時間ぐらい話せるのですが、かいつまんで言うと、あれは国民が民主主義に目覚めて、エリツインを応援したからクーデターは失敗したのだと良く言います。それはとんでもないデタラメで、あれは本当は非常に際どかつたのです。最後の段階で、クーデター側の命令をうけていた空挺部隊の司令官が、エリツインの方に寝返つたのです。八月二十一日の早朝、エリツインのいるロシア共和国の最高会議の建物、ホワイトハウスと呼ばれている建物を襲

撃しなかつた。これを襲撃していたら、おそらくエリツインは三十分で命を断たれてたに違いない。ところが空挺部隊の司令官のグラチョフ少将という四十三才の男がいます、これにエリツインが電話をかけた。「協力してくれ」と、この時、二人の間にどんな会話があつたかは、今も公開されてないので、私ははつきりなにか二人の会話が読めるような気がする。つまりエリツインはその時、エサを投げたに違いない。もし、クーデターの間に寝返つて自分についてくれたら、後で軍の最高の地位につけてやる、というようなエサを投げたに違いない。四十三才の野心的な司令官は、最初は二股膏藥をはつてどっちつかずだつたんですが、土壇場でエリツインに寝返つた。私が高んでこんな事を申すのかと言いますと、クーデターが失敗した翌日にそのグラチョフという少将はソ連の歴史始まつて以来初めて、四十三才で大将になつた。二階級特進。そしてこの五月、ロシア国防省が出来ると同時に国防大臣になり、上級大將つまり元師になつた。これはソ連軍では最高の地位であります。そんな事で、エリツインは強引にクーデターをつぶすことに成功した。そして最高の地位に就くのになつた。

ところが、クーデターが成功して共産党がつぶれ、そして一挙に各共和国の独立傾向が進んで、モスクワから全部はなれた。ところが旧ソ

連という国は中央の共和国がはなれて独立してやつていくというようにはできない。例えば一つは電力網をとつてみましょう。旧ソ連の電力網は、各共和国に各々が必要な発電所があつて電力を供給して、各共和国内を自給自足してゐるのではなく、立地条件によつて発電所があるので、ある所には大きな発電所がいくつもあつて、その電力をいろんな風に分散して、電力網を通じて各共和国に供給している。共和国が独立して、ある電力網を切つてしまつたら、電力が全くなくなる所もでてきてしまう。

それは、他のいろんな生産も同じです。例えば、自動車の生産を例にとりますと、ある共和国ではシャーシ、ある所ではエンジン、またある所ではボディという具合に作つてゐる。いづぞや、ソ連の新聞にもしろい写真がでてました。ある工場から新車がパーツとでてる。その写真が並んでゐるわけです。でもこの車は一台も動きません。なぜならキャブレターが付いてないのです。キャブレターはある共和国がつくつていて、そこは、独立してしまつてて部品の供給がストップしてる。こういうのが食料の事等にも言える。

例えば、カザフという国は、日本の数倍はある大きな国ですが、そこではムギはとれない。綿はよくとれる。ですから他の国からムギを買つて綿を売つた。それがストップすると、到



底独立して国は生きていけない。ウクライナは独立すると言っていますが、そこでは石油は一滴もとれない。やっぱりロシアからパイプラインで送られてくる。ロシアとの国交が途絶えてしまうと石油は一滴も来なくなる。そうするとすぐエネルギー危機になってしまう。

今まで一つの有機体として動いていたものが、突然独立しようとしても、それは、どだい無理な話なのです。独立、独立と熱にかされて自分らのやりたいようにできると言っていた頃はいいのですが、熱がさめてくるとハテ？何もできなくなりました。石油も電気もない食料もない、それが今の状況なんです。それで少し元にもどしておこう。

これは日本でもそうですが、日本は終戦直後、戦前の全体主義的体制が嫌だ、また民主主義化政策を占領国がやったために、例えば戦前の共産党は非合法政党だったんですが、戦後は合法政党になって共産党が議員を沢山もって、日本は左傾化してこのまま日本にも共産党政権が誕生するのではという観測を出した外国の新聞社もあつたくらいです。それはしかしそうはならなかった。急速に左傾した。しかし数年経つと日本ではいわゆる逆コースがあらわれた。社会というのは一方に急速に傾くと、またよりもどしがくる。これは人間が住んでいる社会の不可避の力学です。ロシアも同じ事が言えます。

去年の八月バツと共産党をなくして左傾化した。共産党をなくして左傾化したというのも変な話ですが、共産党という名の保守党があつて、というのも不思議なものです。共産党がなくなつて左傾化するというのはロシアの用語で、少し変ですがそう理解して下さい。そして今、また旧共産党勢力が力をもどしてきてるんです。

まあ今言ったような、生産とか、基本的エネルギー供給網とかいふようなことがある。それからもう一つの人的な問題があります。旧共産党というのは、その周辺に優秀な人材を集めてました。ですから、旧ソ連で優秀な人材といえは一〇〇%共産党員であると言つていいんです。しかし、その一〇〇%の人が全員心から共産党を信じていたかというところはまた別の問題です。でも共産党員だった事は確かです。しかも、優れた人材が多い。そういう訳で共産党員だというだけで全て排除するという雰囲気は、クーデター直後にもあつたのですが、それではいけない、やっぱり仕事のできる人は入れなきゃいけない。このエリツイン政権内部でも仕事のできる人を探すと、ソ連ではやっぱり軍需産業を中心とした巨大企業グループの中に、優秀な経営者というのはいるので。こういうところから大臣となる人を選ぶ。いくら民主的な理論を言つても、学者として優秀だか

らといつてそれを大臣に入れても、仕事ができない。それより現場で仕事のできる人を選ばなくてはならない。そういうので旧共産党圏の人が帰ってきてるので、今、エリツイン政権の崩れがでてきけると新聞が書いてますが、これは右傾化というか、元にもどつてきているというか、ある意味では正常化してきていると思うのです。この傾向はこれから強まると思います。これはエリツイン本人が右の人を連れて来てるのではなくて、社会全体が正常化、もとにもどりつつあるのです。その事を鋭敏な、政治に対する動物的嗅覚を持つエリツインさんが感じとつて、そして自分の政治に取り入れているに過ぎないのです。

まあ今度九月十四日に日本に来るはずだったのですが、これを取り止めた。これも何かエリツイン周辺で右の保守的な勢力が強まってきたりしますが、これらが北方領土は返さない方がいいと行かせなかつたとか、経済が低迷しているから来なかつたんだとか、まことしやかな説が流れています。これは全部為にする議論でありまして、今度の訪日中止の真の理由ではない。そういうことはみな一、二ヶ月も前からわかつてたことなんです。訪日四日前に中止を申し入れる、土壇場の理由にはならないんです。ロシア社会が全体として右によりにもどしが来るといふのは二、三ヶ月も前にわか

つてたのです。経済が悪いなんて一年も前にわかってたのです。

それでは何が？ といいますと私は、中止のあった日、実はNHKテレビに呼ばれてまして夕方七時のニュースにコメントを出したのですが、これはロシア外交独特の戦術ではないか、非常に少数意見であり言っている人はいないんですが、つまり土壇場に中止を申し入れる事で、日本にショックを与える。そして日本側は今迄、北方領土問題でやたら強硬な態度をしていたからダメだったという説を正当化させて、日本側に何か少し配慮させようという信号の意味があったとコメントしたんです。最近、エリツイン政権の中から、実はそうだったという暴露記事がロシアマスコミに出ています。

実際、西ヨーロッパ、アメリカから、日本は北方領土の問題であまりにもロシアに強く迫り過ぎたのではないかと、との議論もできています。こうなると外務省も少しタジタジとなるのですが、しかしここで日本外交はタジタジするのではなく、一本筋を通してもらいたい。これからもやっていく北方領土問題というのは、原則の問題だったと思うのです。国際正義をとりもどす返還であって、あそこを経済的に利用するとかしないとかの問題ではないんです。あれを経済と絡めるといするのは元々間違った議

論でありまして、北方領土を返してくれたから日本は向こうに援助するとか、そういう話は下のだと思うんです。また、ロシア人を最も刺激するんです。つまり島を売るといって、ロシア人を逆なでするような、札束をちらつかせて、金をやるから島を返せなんて、これはもう最低の行為です。ロシア人は特にこういうのが嫌なのです。

ロシアと長い貿易経験がある前川塾長が最も良くご存じだと思うのですが、これからそういうふうな北方領土問題を、日ソ関係が正当なる国際法の原則に基づいた形で、堂々とやって頂きたい。それからエリツインが日本に來なかつた。あれは確かに国際儀礼にもとる、非礼な行為であります。こういう事がありますとすぐ日本国内ではヒステリックに、あんなひどい事をするロシアという国はもうとんでもない国だ。確かにかなりとんでもない国ですが、だからもうあんな国とは付き合わない方がいい、北方領土のことなんてほっとけと言って、要するに付き合わずに自然死にまかしてけばいいという人もいるんですが、しかし私はこれは少し暴論だと思います。やはりロシアという国は少し近所迷惑な国ではありませんが、やはり日本の近所であるのは確かです。となり近所とは、やはり付き合わなくてはならない。近所迷惑な国であつても上手く付き合っていく知恵を出

し合つて、またあの国は世界で最も資源のある強力な国です。軍備も凄いい、こんな国を無視してはいけませんのでありまして、こういう国とは短絡的な思考ではなく長い目でもつてじわじわと付き合つてゆく。いろいろ温もつたり、冷たくなつたりといろんな関係があるのでしようが、ロシア人は、非常に時間の長いペースペクタイプに生きています。我々日本は島国根性で少しせつちかちな国民ですが、そういうのもうまくすり合わせてじっくり付き合つてく必要があると思うのです。今日は少々話が大幅に散漫になつてしまつたのですが、時間も少々超過気味ですんで、これから質問の方に移らしてもらいたいと思います。

※DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。